

元気 いっぱい!

須恵小学校 4 年 大豆の種まき

豆腐や味噌汁、おからなど大豆を使った食品は私たちの食卓で毎日のように目にします。しかし一粒の大豆が芽を出し、さまざまな食品に加工されるまでの過程は意外と知らないものです。そんな大豆づくりに挑戦し、収穫した大豆で豆腐づくりをしようとして取り組んでいるのは、須恵小学校4年生のみなさんです。

取材に訪れた日はちょうど種まきの日。小学校近くの畑に集まった児童は、「小さいね」「意外と硬いんだね」という声をあげながら、指であけた穴に一粒一粒大豆をまいていきます。「こんなに小さな粒から豆腐やきな粉などいろいろな食べ物ができるのですね。」不思議そうに話してくれたのは4年1組竹内智貴くん。手のひらに乗った一粒の大豆が持つ大きな力にすっかり感心したようでした。

今日まいた種がいくつもの実をつけ、収穫の時期を迎えるのは11月。澄みきった秋空のもと、手のひらいっぱい大豆を乗せて収穫の喜びを分かち合う児童の姿がみられることでしょう。



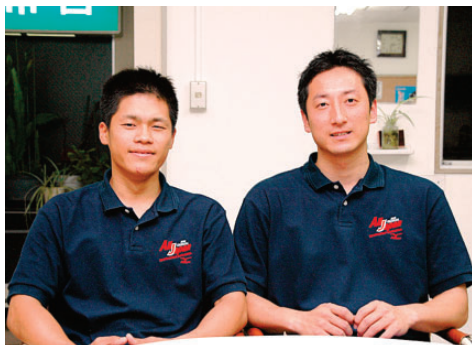
▲「こんなに小さな大豆から豆腐ができるなんて」秋の収穫が楽しみです。



▲指で開けた穴に、大豆を2粒ずつ入れていきます。

夢 いっぱい!

子どもの力を活かすこと それが指導者の努めなんです



高千帆バレーボール教室の二人の若き指導者

わかまつ 宗徳さん (監督)
ふじもと 信哉さん (コーチ)
藤本

※写真右から

今回の表紙を飾った小学生のバレーボールチーム「高千帆バレーボール教室」に、6人のメンバーがそろったのは今年の4月。強豪クラブがチームづくりに2年、3年と時間をかける中、同教室は控え選手なしのその6人で、新チーム結成からわずか2か月後には県大会を制するという快挙を成し遂げました。そんなチームの急成長を支え、選手を全国大会へと導いたのは2人の若き指導者、若松宗徳さんと藤本信哉さんです。監督である若松さんが7年前に設立したこの教室を藤本さんがコーチとして手伝うようになり、以来、二人三脚で少年バレーの指導を続けてきました。

もともと中学・高校とバレーに打ち込んできたお二人ですが、指導者としてスタートした頃は、小学生を相手に四苦八苦。「最初は、体の小さい子どもたちに戸惑うことも多かったですね。大人が考えるようにはできませんから。」という若松さん。まずは少年バレーを勉強しようと、時には、九州や広島にまで足を伸ばし、ベテラン指導者からその指導法を学んでは藤本さんと試行錯誤を重ねてきました。今でも指導法などについて二人で語り合い、気が付いたら深夜になっているということもよくあるそうです。「少年バレーは選手の能力だけで勝敗が決まるわけではないんです。子どもたち一人ひとりの力をよく理解して、チームとしての完成度を高め、試合でその力を最大限に発揮させるということが大切。そこは指導する側の責任なんです。」と口を揃えるお二人が築き上げてきた信条は「子どもの力を活かす」ということ。

試合に勝っても負けても全力を尽くす子どもたちの純粋さには、いつも胸をうたれるという若松さんと藤本さん。子どもたちの真っ直ぐな想いに応えたいと懸命に教室を引っ張ってきたこれまでを振り返りながら「バレーの指導なんていってますけど、本当は僕たちの方が子どもたちから教えられることが多いんですよ。」と語ってくれました。